

## 平成24年度「岩手・生と死を考える会」活動報告

中村一基<sup>1</sup>・千田 浩<sup>2</sup>

(2013年3月5日受理)

Kazumoto NAKAMURA, Hiroshi CHIDA

The 2013 Report of the Committee on the Consideration of Life and Death

### (1) 中村代表あいさつ

2年目の3月11日がめぐってきました。ただ、現在の日本の状況は、大震災を過去形で語るには、あまりにも不安定な状況が続いています。自然災害と呼ぶには、あまりにも大きな自然の力を見せつけられ、呆然とした事態から、立ち直ろうとする復興の動きは、もちろんあります。そのために、自分たちが出来る最善を尽くすことが大事であることは、誰でも重々承知しているはずですが、ただ、日本全土が、これから起こるであろうと、予測されている大地震・大津波を前に不安感と無力感にとらわれているのも事実です。フクシマの事態を目の前にして、原発も不安感をいっそうかき立てるものとして我々の前にあります。「安全・安心が夢である」ということが二重の意味で、実感として感じられる今日この頃です。この事態を、どのように理解すればいいのか。その問いを、自分なりに答えるためにも、今年度、中村は、4月には「死生学入門～「生と死」の現在をめぐって～」(NHKカルチャー)、8月には「ターミナルケアに関すること」(山岸和敬荘職員研修)、11月には「死生学入門～他界観と葬送文化～」(放送大学面接授業)、12月には「近代日本の死生観」(教職経験者10年研修)、また、原子力(核エネルギー)の問題を年が明けた1月と2月に、「原子力(核エネルギー)とゴジラ神話」(全学共通教育「環

境を考える」2回講義)というように、「生と死」を考える「死生学」を、自分なりに語ってきました。「岩手・生と死を考える会」も、来年度は10年目になります。よく続いて来た、というのが、正直な感想です。そして、毎回言っていますが、会員である千田君や阿部也寸志君(一関二高教諭。福祉担当)、連絡調整担当の伊藤弘子さんなどが、いればこそ、というのも正直な感想です。

### (2) 「岩手・生と死を考える会」の活動について

本「岩手・生と死を考える会」は、「生と死を考える全国協議会」の活動目標である「死への準備教育・ホスピス運動・死別体験者のわかちあいの場づくり」という3つの目標を意識しながらも、設立時の場の設定として、「(1)教育現場における『生と死の教育』『死への準備教育』についての学習の場とする。(2)生涯学習の一環としての上記の教育について、総合的に学ぶ場とする。(3)『総合演習』(大学での演習・中村担当)の発展の形も取る。」と定めており、最終的には岩手県の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラムの開発作成・実践を目指している。この点が、本会の最大の特徴である。全国に53ある「生と死を考える会」の中でも「死への準備教育」に活動を特化していることが、本会の売りである。ただ

<sup>1</sup>岩手大学教育学部教授

<sup>2</sup>岩手県立水沢高等学校教諭

し、年と共に「死への準備教育」というデーケン氏が提唱した名称は、ほとんど使われなくなり、「生と死の教育」「いのちの教育」へとその名称は、変化している。現在では、「いのちの教育」（「いのち」はひらがな表記）が一般的であると考えられる。

代表を務める中村一基教授も、「岩手県教職員10年経験者研修」《現代的な教育の諸問題》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」を担当しており、平成24年度で第9回を数える。本研修は、岩手県教育委員会主催の研修の一環であり、このような形で、教員が「生と死の教育」「いのちの教育」を学ぶ機会がある県も全国的には珍しいと考える。残念ながら、諸般の事情で開催日程が、平成21年度から1日の設定となった。（平成20年度までは2日間の日程であった。）1日の設定となってから、4年目を迎える。また、研修講座の名称も平成23年度は「3・11以後のいのちの教育」、平成24年度は「近代日本の死生観」となっている。

### （3）活動の状況

平成23年度

第1回（2011/5/7・通算120回）「グリーン・ケアの重要性を話す機会の企画の協力について」（担当：中村）会場：教育学部棟国語科資料室（中村研究室前）

2011/6/11 高木慶子先生（上智大学グリーン研究所所長）講演会「愛する人を亡くすということ～喪失体験と悲嘆ケア～」会場：北桐ホール  
第2回（2011/6/25・通算121回）「高木慶子先生の講演会について」（担当：中村）「愛する人を亡くしたとき」（担当：鈴木）

第3回（2011/7/23・通算122回）「流産、死産、胎内死亡、新生児死亡等大切な人を亡くした母親、家族のグリーンケアの実際と大切にしていること」（担当：山本）、「今後の活動について」（担当：千田）懇親会

第4回（2011/8/20・通算123回）「『ドリームランドとしての日本岩手県』考」（担当：中村）納涼

懇親会

第5回（2011/10/29・通算124回）「教科書の中の宗教」（担当：千田）

第6回（2011/11/19・通算125回）「映画と講演会の集い」（担当：中村）懇親会

第7回（2011/12/28・通算126回）「教職員研修10年研・3.11以後のいのちの教育」（担当：中村）忘年会

第8回（2012/2/4・通算127回）「シンポジウム：震災と岩手の教育この一年」（担当：中村）懇親会

第9回（2012/3/10・通算128回）「上田・生と死を考える会活動報告」（担当：小高）懇親会

平成24年度

第1回（2012/4/21・通算129回）「持続社会の展望一脱原発から自然エネルギーへー池内了」（担当：中村）懇親会

第2回（2012/5/19・通算130回）「森岡正博『生者と死者をつなぐ一鎮魂と再生のための哲学』（春秋社）」（担当：千田）懇親会

第3回（2012/6/16・通算131回）「岩手県高等学校道徳教育資料『こころの道標』を活用したいのちの教育の実践について」（担当：阿部）、「辞世と挽歌」（担当：中村）懇親会

第4回（2012/7/21・通算132回）「第36回日本の死の臨床研究大会年次大会」（担当：中村）懇親会

第5回（2012/9/8・通算133回）「現代における〈死〉の動向と〈終の住処〉(1)」（担当：中村）

第6回（2012/10/6・通算134回）「現代における〈死〉の動向と〈終の住処〉(2)」（担当：中村）、「写経で被災地支援」（担当：阿部）懇親会

第7回（2012/11/17・通算135回）「第36回日本の死の臨床研究会年次大会報告」（担当：中村）、「『人は過ちを償うことができるか?』の取り扱いについて（『こころの道標』活用法）」（担当：中村）

第8回（2012/12/22・通算136回）「教職員研修10年研について」（担当：中村）忘年会

第9回（2012/12/28・通算137回）「教職員研修10

年研・近代日本の死生観」(担当：中村)

第10回(2013/2/9・通算138回)「教科書に載った『わすれられないおくりもの』」(担当：中村)

第11回(2013/3/16・通算139回)「今年度のまとめ」(担当：千田) 懇親会

### 【補】中村の講座内容

\*「死生学入門～「生と死」の現在をめぐって～」(NHK カルチャー)。2012/04～2012/06。

- 1, 死生学とは何か?
- 2, 医療技術の進化と生命倫理
- 3, 医者と僧侶との対話
- 4, 絵本と「いのちの教育」
- 5, 辞世・挽歌の詩歌
- 6, 葬送と墓のゆくえ

\*「死生学入門～他界観と葬送文化～」(放送大学面接授業)。2012/11/24～2012/11/25。

- 1, 古代日本の神話的他界観
- 2, 古代日本の葬送と墓
- 3, 平安時代の仏教的他界観
- 4, 平安時代の葬送と墓
- 5, 中世・近世の仏教者・神道家・国学者の他界観
- 6, 中世・近世の葬送と墓
- 7, 近代の柳田國男・折口信夫などの民俗学的他界観
- 8, 近代・現代の葬送と墓

\*「近代日本の死生観」(教職経験者10年研修) 2012/12/28

\*「原子力(核エネルギー)とゴジラ神話」(全学共通教育「環境を考える」2回講義)。

#### 第1回【ゴジラと原子力】

\*ゴジラは、水爆実験によって被爆した古代恐竜。

\*被曝により、放射能熱線を吐く原子怪獣へと変身させられた。

\*原子力こそゴジラの生命エネルギー、原発を求め彷徨するゴジラ。

○ゴジラの潜む海、熱線を吐き闘う所、放射能の汚染地帯となる。

●ゴジラは、被爆国日本の根底にある不安と恐怖を体現化したもの。

#### 第2回【自滅するゴジラ】

\*水爆怪獣(同時に原発化)したゴジラを倒せるものは、存在しない。

\*ゴジラに敵対出来る者は、ゴジラ細胞をもつ原子力怪獣(分身)。

\*ゴジラはメルトダウンを起こし、臨界点に達し自滅した(はずである)。

○経済成長に比例して増大化したエネルギー消費と原発の暗喩。

●ゴジラ映画は文明にとって両義的存在の《原子力(核エネルギー)》の黙示録的景観を描いた映画。

### (4)今年度の活動について

2003年に設立した本会は、上記のような活動を継続している。会員同士の日程の調整がなかなか難しいということはあるが、なんとか最低限の月1回のペースを崩さず、持ちこたえているといった状況である。

本会の活動においても、一昨年度の東日本大震災という大事件を避けて通ることはできない。未曾有の大災害は、岩手県、特に沿岸部の人々の生活を根底から揺るがした。

本会としても何かできることがあればと考え、活動を模索継続している。例えば、今回教職員10年研修に参加していただいた、中堅の先生方は全員沿岸の学校から転勤なさった方々ばかりであった。つまり、東日本大震災の直接の被害を身近で経験なさった方々ばかりだということである。そのような先生方から、我々会員も学び、今後の学びに結びつけて行きたい。できることは限られており、少ないが、それぞれの会員がそれぞれの立場で、継続的にできることをしていきたいと考えている。「継続は力なり」というが、小さな活動を継続することによって、岩手の地でできる教育活動を模索して行きたい。

### (5) 今後の方向性

「生と死を考える会」の活動ではあるが、一昨年度の東日本大震災を経験して、これから何ができるか、何をしていかなければならないかを模索する年だったと言ってもいい。そして、その模索の解答は、残念ながら今後会としての活動を継続しながら、考え続けていかなければならないことだと思う。

年度末には、今年度の活動の総括として、「岩手・生と死を考える会」編集の『いのちの教育ハンドブック第7集』発刊予定である。今までの活動を蓄積しつつ、来年度も活動を地道に続けていきたい。